俳諧文庫

五十一

42

枝繼集

下

へ 5
1139
42

へ5
1139
42

雲雀鳴て麦畑は晴れ白れ　多加 種丸

草菴

春待や柳ひと木を門の中　城ヶ谷 左良義

晴天に渉瀬わたる蘆葉かな　志一

鶏の声聞て暮つかる雪の家　安輝

池水に流るゝ枝ちらしより　桂葉

菜畑にまきものつゝや菜の煙　里雪

門松に風の落てはなれけり　梅山

落さまに風の見えけり鶯の羽子　散里

明かる萩の笹に音して時雨けり　嘯月

北へ風返して里を走りけり　蒿堂

雪には萩の早う更るや町の鐘　东光

一夜にはくもる戸口の走りけり　よし丸

下りて来し山を見返す時雨かな　粕壁 渓月

山には火の細り見ゆるや冬の月　宇都の宮 梅二

月代を立ちまはる萩宿かな　其翼

客には下駄庭へ出て葉の花　塵外

吹降の中に明るし枯尾花　梨長

崩振て又居つきけり雪の鷺　蘿い

降音もやまぬ色かかる雪　子容

居る君の人も菊主あり落し水　芦野 枫英

芦野の柳

雨霧の月日くさ稲てちる柳　貞士

秋風や海へ出てゆく渡る雲　白川 佛孫
踏出し素足のあとや薄氷　清素
顔白や隣の垣に近く灯　對月
稲妻やひやくぬける竹の奥　鳳毛
錦深くは来て見せたるあさせに　須賀川 たよ女
穂よまかり落る日の照るきざしに　清民
紫蘇の実もともに白き菊の花　素高
仲過て下葉まびしや静かな　静文

石橋の名さへ通ふや木槿垣　雨石
往来ての中を通ふや秋の風　郡山 一仙
浅香新沼
水あせし沼やふるくあさぢの風　貞士
とまりまでつひ持出し萩植に　福原 一蓑
よくみれば二たてまかし庭の萩　米肉
星ひとつあらはれ見ゆる野分に　三石
鉢うゑの数ましりや宿かゝし　豊水

静なる萩の明りや竿の露　方儀

稽古夜すくや縄手に草の影　杉田 英泉

荒壁に萩の葉さはる寝室に　二本松 东里

志る葉より縫めたる日の簀　丁酉

坪竿に一節越し紫苑かれ　郡家

曲尺に手より色染や菊畑　梅井

出るや度々門すく秋のあつさかな　一旦

秋すむや宅葉さく出るかれ　西英

みたまつる梅もさきまま星迎　夷巣

新宮や一番船の人まくす　菊也

鳴立てふらつく芦の玉葉に　奥端

こゝみあふてきみのぬけし十夜に　文鶴

悲に葉も落ちり秋に風　鳥光

民神の祭りも過て露時雨　つや女

うしろかな傘よりもさむ時雨に　里家女

水仙を飾なう清して咲せたり　柳眉女

蕣や写ふある宵の覚に次　菊翠

鐘打ハ經る松のあき晴間かな　東暁

風向を見て出る野路の芒かな　埋山

稲葉結をほとさはけや菜の色　只川

みそさゝゐ分ある斗き枝うつり　夢来

いつも來る枝に木兎とまりけり　清谷

窓引をぬけて行也雁の声　洞水

湯に沁る音に寒さの菜に也　鼎池

安達ヶ原

黒塚やさまかはき秋の風　貞士

まつ秋や人の見とける宵に月　士由

更る夜に白にさはるか萩の声　福島 心趣

蕣や思八雪にまきまそら　大賛

罠かけの鐘を振ひぬ九月堂　之平

遠山にをとみち見とゝや寮の窓　桂舟

隣まて並る高まくらや盆に月　素五

き夜やかたりくと椋の栗　東壺

河こかる横日さしたり菊の色　守三

一あらし来ては木の葉の音ふるき　素湖

肉のある處拾ひし熟り柿　直樹

ちる葉手あつめて折よき桔梗かな　草居

侍町に家あらくく雑炊也　一英

名月や川を堺に素きゝけ　素杉 岑阿

ふ納地のきくけふ伸る芒かれ　四敎

ゐ峰や藤志ろ禁家は遠めり口　杏園

嬉の志ほり見えて更る也十三夜　柳枝

耳よせて庭跡の呼く西風に　無睐

ふでのあかしちる稲また杯に　澤水

日くらしの聲は名残や一里塚　桃居

果向すかしおしきり杖の餘　松翠

阿武隈川まで

鮎落て水なむなしく流れけり　貞士

実方中将の記念の笠と聞て

植足してあやめも添る笠しら　貞士

新宮や美かねに志みし温泉の匂ひ　大川原 江三

唐あくやひらひら涼る夜明し　一甫

松明の火たえなかる也荻の声　加祢女

十露盤の玉の行くや秋の雨　三朝

咲なから根よけして老萩葉の色　角田 梅安

さり出る水よりおひたり女郎花　槻ノ木 詠柳

夢とあてあときなまぬ露の音　伊豊 心阿

野良や萩に降し白雨　禾月

七夕やもしも明ける隣の燈　白水

名月や子弟をまつにゆかある　松祇

萩見かしやそれしの先になへく　梅露

秋風や志ありのぬける舟の綱　子良

稲妻や萩よりかゝる舟の中　峯堂

川ぐしし尾ぬれて来の月　南畝

松とのゝおとこし山はみちゝの秋　如風

連待て馬たてせおく萩か下　化雨

蕙澤の硯前にて

すゞしさのすは影さし秋の雨　貞士

沖は暁のゝ宵をへえも萩の寺　素亮

かり近うすゝみよ進めり萩の錦　東家

帰会を写す萩の明る鶴かな　通山

宵はやまた空かなり数十三夜　蕙山

絶まなき水音寒の秋の声　徐宜

明きらぬ霧の照りや草の上　知休

静さに戦き出したる芒かな　生々女

神の社晩のまくある閏そ帰水鶏　柳人

蛙ひとつ漂ふ萩は末の流れ　筆好

露心はきもまて山ん遠さかな　如水

照清く見ゆ河骨のさそまなり　雨葎

湖は浪をるくもりや飛ふてる　勝良

一くみして梢へ入る清水かな　文居
雁啼や雲のまゝに戻る峯　蕉葎
粧ふて根にかへりけり草の露　渺立
月曇るとおもへはかゝる雁　新月

塩竈神社

手をつけて祝や苔の雲に　貞士

松島旅泊

まつ島や遠き心の行もとり　左

八月や油さしてむしの声　くに女
初汐のよせてくるや月の顔　柳英
晴渡の霧かけぬしそよ秋也　塩竈　住好
身に染て障子を立る蟋蟀かな　石の巻　二品
吹きくる中真しろ行く草　名取川　葉久
一きつとつけて打きる砧かな　南部　平秀
冬の夜や不意にかゝる朝の芦　黒羽　大嶋
うしろから吹くよさて畑中に　如雪

稗蒔や女もする俳かい　丁巳

手折らく枝もなき冬の梅　其笠

足跡の違もなく雪見かな　浣再

菜畑から鳴立夢路今この春　菜雄

水仙や霜にも負ぬ花の形　柿本 道雄

埋火や鐘の中度に寒る心　雲岳

山茶花や朝日のうつる垣　竹雨

年をとる分別もなし暦かな　加涼里

出て見んきも鳴虫も居る方に　董湖

燈籠や町家並んでふくかな　出羽 二丘

新室や又据て見る石燈籠　羽人

見返しも先も雲ちかく雁の声　匡芝

散かけて見たき草むら萩に月　左十

秋の来る方へと直き松の風　内史

去らかくも匂ひ風ある枯野に　陸奥 抱儀

ゆく秋やいつも青みに岸の松　一止
月うけ細き枝あらしの縄と　流芝
店先に錦荷とく筥を並とあくて　止
象のとくきりに通るたみ庭　芝
咲初る芥子に一重まかれて宿く　止
と隠れしもに鶴て去澄し　芝

雁をふみく文字を書あらひ　止
庭炭に忘れ殖数知也　芝
逢ふよりは母の白髪ならひとり　止
炭のた祈る音もつ気紀　芝
宵月うらもくゝ見ゆる枯尾花　止
罠をかけつまうて狐帰る里　芝
国を出て尾に鉄も甲斐まし　止
今そ恋しき加茂川に水　芝

あくさみて手操る日なた人の来ぬ　山
雛の餅つく隣りやく　芝
降まさる心もとめぬむくなり　山
出かゝしもやめぬあらし峯の　芝
見てゐまて庭屋清水に取合さ　、
素建なとりけつかり出生き　山
きらひとて志らぬ強る鮴汁　芝
鈴は居らぬまて高き家れつく　山

日かさせたよんて旁けたる角ぬき紙　芝
伸てまつ新ゝあくのき四五本　山
あらり失けある寄る麻の船を覚し　芝
恨いとまて志らぬふり出れ　山
何爲んと細まし湿気来を行戻　芝
數ありれ中まちてよ舞　華　山
絵ある賞くわり上弦の新たまち　芝
明とまてまけて杖　鉄角力場　山

子供等に指されし鉢を分て妻 芝
杖を忘れて目出度かりけり 以
落縁の下に来れる上草履 芝
気をつけむ内庭はまた 以
鉢の菜も咲し花に続きけり 芝
水はぬるみて青き川苔 以

文音三吟

出娘ひなし人の姿てりあまたせり 新池
土手は若葉はさらつよき風 勝錦
藍玉の売口まける際もなし 流芝
暖簾ゆるんで牛を牽てむ 池
野は月まつの寺雲り消えて里 錦
蔵乃花は飛く／＼にさく 芝

猫殿は志まぬ角力に遠ひき　池
持よれやうら荷物さしらふ　鋒
子飼しさる教ちまる犬とり言　芝
根によこ赦く　黄葉に売　池
骨をしき世よふたらく牙子坊主　鋒
手入とくの殿藪に自然枯　芝
象におけるをまに月の嘯くなり　池
蒲団ねとつま恙にきせておく　鋒

近年しをたる橋に清手に峰二階　芝
からみあふたる常の座敷　池
湖へさし出て花のちる人数　鋒
目鏡に雛天に紫しゆくか　芝
大勢ら負きしれを笑たまて　池
はありし見ゆのゝ魚見えまする　鋒
流きつく磯水に犬のむくと起　芝
さし出かまし　きゝ下女の物いひ　池

産後ハ居城の痛ミ常となり　池

満らし西へまた敷瀬鳴　弥

美前に素足て戻にあやめ売　芝

出てきこよもて寺よ姥堂　池

村中へより合のまま桃行来　弥

ひ身の流星まきやる深緑　芝

七夕ハ笹にかゝりし内細く　池

篝のゝけて鶏をむし鯱　弥

此比も扇忘れて涼よなり　池

加判とハ禮に雉と莫濃守　弥

山緒を細におこして隆りしさ　芝

見川の茶水を撹はまのまく　池

志る館よあやまく出家よ恋はる　弥

舩よ去きしあとの渡の流く　芝

山城

時雨るゝ庵笠提て掛けたり　菅之

生垣や崖出て行雲に穴　芳英

麦秋にかやまゝ葉も一むしろ　九起

絶兼て迹行蝶や跳ねふき　百篝

月夜にあきハ掛て来る神路山　梅室

代りあふ庭の蓑別きて月見かな　鐡年

去年の火よまたハ眺む紅火燈かな　孤柳

打水にいきまきめぐり桐一葉　鳥岳

釣竿もあつまる家に門葉かな　梅通

むら帆のかしこありて風薫る　呉明

鶯や耳にまかせる聲に嵐　有芦

つく羽子に下くゞり行魚荷かな　枝月

摂津

涼しくと名ふ白し桐の月　其山

手利あけ足語浄き田植かな　穗白

まつ宵や並ぶ路を海ほたる　素屋
あけ渡す一夜若葉む雲しに　渓史
松にあれ風のさそふぬ牡丹に　白鷺
をしまれあまたあれど春の月　影左
又ことし重なる往来や松の辞　林曹
どうさうと思うて寐入しうちなに　梳室
雲らむ風に吹やみかはる月　松嶙

播磨

梅も散ぎてやさし五月雨　可大

淡路

東風凪の夜のちつまりや鳴る尾　其秀
たまに出る杖先明や秋の風　暁柿
座中へ新さは梅に月夜に　半谷
羽子つくや上手なる手に菜の穂る　希康

阿波

動く枝出来て夜明るやなきに　墨一更 松丈

咲さよ川にも多き葉や杜若　源枝

朝まけてむしなく茂るに　万像

伊豫

戸をおせば垣も動くや枯葎　映門

行燈のくもりたるまぬ夜寒かな　宗人

山鳥の尾にひく雲のさかりかな　営居

薩摩

ともして挑灯きえず雲の中　甚松

うちはれてみしりの山の月　波文

のぞくるもあかく見ゆるやあなの雲　山背

筑前

雪の山頭声きりておもしろき　總之

もて来ても枝つは茶屋の窓に　成雪

机手も来るや師走の埃かな　評童

清き合に嘘ともなき接木かな　甫旧

日の出のう風見えそめて月　千江

近江

蓮の葉は青くてきよき稲の花　求有

影は於ゑやつき嬉し起きし　虚白

梅さへのりてらして梅の月なし　魴山

降出して只先ひとり秋は蝶　竿丈

百合さへのり花のあまり小笹原　楓下

伊勢

雲は雲や花に風の峰上野　流芳

ちる程に流れ細りて草は花　つきを

鶯はこそりと竹に年こもり　雀史

焚つけのたらぬ朝湯や花の面　求白

田まはりてなめらかに雪はかれ野　石新

降出てあと先くらし雪は原　梅曉

藤咲て花暮るゝやとまり鶯　湛石

山茶花や舟付し里はあるかなき　いそ不

かりし葉にまゝ二条之影の扇　昌風

尾張

降しきる雨にもひまある霰かな　庭知

持かへる買物しまりけさの秋　芝石

筆前に墨すりかけし日永かな　金樵

菜かくれて蕪さかぬ畑の内　英山

阿ふけなき雲の遠山や秋の空　旭章

鍛冶の音やさらくに白きくの花　而后

咲さかる蓉も見えて冬の梅　雨篁

あと先に出て来し風や梅の花　稼雨

出居より畳みて置きあつさかな　鳥津

身に通る日ざしありや花の蔭　有庄

足る物も日ざし人まかる三んかな　一清

小さかなの寄合ふて来て一枝の秋　梅狸

能き馬に初雪んせて来つかゝり　桃旁

境内の古穴埋る二月かな　蓬陽

時雨るや好き掃除もあと廻し　我竟

雉おろし日は散りのこる高麗かり　李喉

清通りよ花も真りぬ梅ちるも　梵江

信濃

かゝる人よりて岩のむ清水かな　吉坡

枯枝は見えぬさかりや飛鳥山　携平

さびしさや斜中ゆるかゝ星舟　可厚

甲斐

人ゆけば落鮎のよく流みかれ　鞭栞

桜のこゝろかる風あり春の海　可梼

夕風や花のあとなる芝は上　雲里

送りきて来る人見送る庵は中　蘭也

上野

夜葉もありきりは山路かれ　西馬

満汐や木にゆらくと能の露　竹煙

相模

津島みさをまれてかきつゝじ　雨青

おもり手よ上手は志ゝきとりに　梅丈

捨られてあるゝねと嬉しかりゝけん　立宇

さありな揖のお手や古きしら　如ゝ

下総

かき添なは押よ題よ書りた名の梅　一照

丹はをを花つけ見ハ[?]りぬ雪の笠　梶宇

降やめて月の出てあり雪は又　梅渓

加賀

吹降や名所は桜見て歩行　柳壷

窓と見た川を隣の衣雲に　鶯呼

里ハをや岸のなかりや松のうち　北山

似て地よ白志さむ牡丹かれ　牟丈

残きとり先よ見ゆる衣雲に　賀水

志ら里は蛍も飛や岩乃端　悠平

餞（？）

蓑はきけかや老も見えきぬ春　呂鳳

越后

過し日を忘れしさまや夜の鴨　花了女

接木してちひさき心見られけり　乙良

根も土もつくりあけて蕗の薹　西疇

寺町を網てふさかる彼岸かな　柳木

疾ふ足に敷へられけり松の内　眉白

清川を出ぬけて白し春の水　梧菜

宝くけるほど鳴らく月の露かな　道雄

蓬来や月もさえかし灰を吹く　馬業

風折の木の芽出兼る翼かな　菜山

紅梅に梢のきえむ柳かな　来宝

薮深く鶯なきぬ雨もよひ　青鵞

鶯の夜川音も聴つけり　雅道

出羽

板橋の遊び見歩行きとみかな　擢月

晴過て雲まく雲し夜の桜　兎園

名月やわたりし橋の一ツつゝく　蹊山

鮫屋鈎て蝦よくつまゝる夜の月　吟霞

宿かりて見る日ハ淋し菜の花　松花

呉竹や尺えまたく垣をまもりけり　縁峰

菜の花や牙雉子来てなく崖　稲水

四方かゝる下枝のあとあり畑の梅　涼莎

初雪の柴垣つゝく小村かな　其三

来る人に行燈向るをみなへし　左梁

鳴まいと扣く人ハせはし小田の雁　古翠

早飯に定めし夜より帰る鶴　一素

川むかふ田舎になりて梅の花　霞江

名月の宿にさまよぬ庵木かな　大来

陸奥

木嵐の岩屋たしかや花盛　雲才

竹の子や残りし根のつ清き藪　泉士

七草を仕ひて出かし眠りけり　菜三

屋根裏は蔦を出るとんぼかな　宗古

水かみの暴風にむしの一夜明けり　若了

日和妻や落雲ちる山に猿　句宣

掃退る古葉にあとや滑り入る　含用

冬の芥を秋の暮し松や初時雨　天趣

崗朶の葉をせまる山路や妻に雪　波同

見覚ねてむ這ふや椽の縁　碩水

まだ紅葉も出たる抱たる土筆　萱漏

嵐やまた猶またまた弱法師　幻分

秋らしく思ふ夜もあり夜の月　風何

いたいけな手足見晴や見えぬめ　石分

行秋を見たかる声は悦気　淡良

時雨ても薪さしたる枝の音　梅石

花萩を見て来て母たる茄子紫　旦高

やゝ降れば時雨まじる棹の実は　菜瓢

ちらいよく高音ハ数多に軒に梅　流芝

帰るさにうつしつる香も花の声　清游

水ぬるむ笛の音のやさしきて　柳つた

むかし織手の声はなき臥　以礼

ひらくと桜に玉は川月の露　三江

人去に通らぬ浦のあき池　橡好

橡糸に柳の当に滅る彼岸過　桅江

ままに不自由な春の数 稚子　素吾

ひげも弥く新らしき窮屈さ　葉甲

火焼に出て行とてやく　光考

算に生へと花の鐘にまわりの里　錦賀

り和に遠く見ゆる伊豆山　路暁

あくさみに磁石と出る舟の月　游

砲に音ある耳きまり事数　画

菜よりこそ淡き風邪をもて利て
翁ましらへる兄は筮用き
鶯も繍を舞ふことをきまぬ定量
始まれ薬をえらむ棗つき
旅人の力如きこの夜憐
篤きは家は實躰亀の探
鳴きてか縁しけき嫁をまひ
まとひ烟草か香はあきなり

礼　三　好　桃　吾　甲　考　旗

らかは壁のそのうく夕まみ
篳操りは中に般若家く
露うきけさあと跡る大板
おもひもよらぬ宮は結操
分けある誘射の稽古の気味まろき
あれまはものこの手汲まゆく
夕月うえつ色あけしる土産物
志きは枝より板の突きさく

暁　芝　多　讃　三　礼　桃　好

籠球に退居してゝ秋の風　甲

人はいきぬ瘀癖こゝする　音

瑞銀まて集て巴る仲間せよ　賀

桐油に馬は尿らとおしる　考

をとゝと志里つゝ垣をゆきぬむ　芝

植しかくりは堺画あり書し　暁

武蔵

おもしろき庭しぬ磨は夜長哉　玉英

晴てこゝろはへかゝり秋の雨　南ゝ

睡ひとゝ川越て消えり雨は晴　斎三

咲きあゝゝ川を巻てゝ枇杷の花　先之

鶉の羽根のかき寄て見ゆ飯芝哉　正价

降出せそさもあれ雨やかんて鳥　嵐窓

初恋やせゝゝゝうらと哉壁隣　白水

架を出る猿に落る木の葉かな　芝扇

咲そのけて寒に逢し梅の花　五八九

けさも樹にへうけ見えり　呉雪

門松のとまていつ迄の日ざしかな　源花

在府

物好も寒手あまりし夜半霙　阿波 鴻楼

夕暮やひとりもたくさ風のきる、　栗葉

田支も椿も織さも不ぬ衲　出羽 ろ孫よ

縄帯に杖は象樂や種瓢　美濃 寿縁

短夜や霧に伸る草の丈　淡路 魚楽

木も常ならくや若萩の葉はつよみ　越后 鷺眠

さらし井にかゝる緑や一ト家　下総 羽人

かんこ鳥なくや家ぎくあちら向　後河 芝往

藤の花やおしきる汲もさしその夕　上総 金波

秀雅も早くも埋の紅子観　下総 濱吉

きゝしさや袖のうつり鶏の月　松秀
打水に庭はくらく蛙かな　左尓
多ち花や蜘の巣かゝる家の跡　仙葉
門田まで影さし鶏の蔵里に　旭洲
風薫る木草はうりや日の高井　辨之
葱引て這入小家や梅は花　金令
年玉や始終りもう兎乃まれ　鳳朗
水白く素麺高き茅の輪かな　連流

谷水に見ゆる師走は焚火かな　茶静
尋ぬきて菜雪にあらぬ花の宿　風外
あきて桂山は根遠し子規　月窓
星は前男の声きまりけり　呂文
ふくろけて蚊の雨きく夜中かな　逸湖
落つめて見ゆるや花の影あかり　东臣
さしたる木と思はぬ門のやまぶき　聴松
鶏ゝふかゝる向ひや窓は梅　喜斎

籠なから秋の蛍と来になり　東子

家に麻なくても叩やさる槌　松什

萱飯や根に咲初て地になれ　伯壺

若水に盃ふつもゆん庵とも　杜有

雲もなし轉はそしる雪錦かな　呂川

飯に帰る日を昊けむと秋の風　五株

遠く叩き打一二やさ川鳥　渓窩

草村に草れ来る風や落葉藪　尼橋

筆を育る竹は落葉の乳　丁知

寒けれ夜や家をおくりて哀み　南枝

夕立や夜とくりかえ左はすし里　言山

夜めぐりし小草や花もきまりつゝ　茶頃

君か代や何変はまゝて末宮尽　枝玉

刈中は露打まらん秋の船　味舎

まるくとも足にや扇のめちぬ　小柯

雲は峯ふの手川もの光りぬ　滑萎

蘆の穂を誘ふ風あり秋の月　米山
葉先よりこけてとまりぬ梅の露　梅笠
音もなくおちめてぬるき清水かな　呉球
夕月の薄く影さす蚊屋かな　魯心
子規帰門やさらし白　山外
菜大根の里も時得て梅の花　見外
まゝ土地の人のみ通る柳かな　硯岩
初冬秋虫まなかるや法通里　湖十

菜花や庵にいさゝか何日暮　尾山
雲となる秋坊のたちやあさ桜　青和
遠見にも一筋つ秋やあさき水　惟草
柚に味噌の念忘れけり梅の花　京卯
あくめでやまこゝ梅も咲乱れ　湖山
初東風や魚よせる火の見えかくれ　氷壷
稲かりて鴨の寝ぐらに木の実秋　由之
行さきの田にやつめたき清水かな　双

神風はさらへもふけ競馬　一貝
夕されや来る筋替て帰る鶴　祖口
蝙蝠や御城の松に集りし　喬水
初春の中にも早し蕗の薹　滄ゝ
院ゝ手明星へさき々り花は雲　秀朗
つゝしとも見えぬ葉の木は茂りけり　太祇
良ありて木の根を出る春の水　如芋
宵過や門に蛍飛ぶ其の里　芙古

鷺に菜もまたしも若菜や山のかけ　萬山
秋来ぬと露を錦の座してそれ　由琴
ちる迄へよけて歩行桜かな　芦月
汐やせの松もふところや春の月　吾人
買つさみたれのおよたの舟　木子
麻過して麻直里なりこゝは　呉木
恵方むけた横顔つきる初日哉　貴友
五月雨やゆきて涉る早瀬　兼化

待てゐる夜の短くなりにし子規　素明

五月雨やさ庵てあさき萩の芽　稲鳩

汐さしやうろ帰る立秋はゆき　常陸 素明

草の葉の涼しく床しき清水かな　巣明

去川きりと島の見えけり青嵐　巣欣

心清て流るゝものゝ水すゞし　巣樗

物いはで一日まで夜出かな　巣豊

親子居て見ゆる暑や陸の人　巣随

山つけや水かけまた木下やミ　巣聴

味噌蔵の用心土やこぼれ稲　巣谷

夕風に打り秋ちゝのき門田かな　巣光

鮮嶋や時きりてくる状つかひ　巣湖

暮もかりゆきて見えぬ雲雀かな　鉄巣

誰も来して夜出の軒に花一把　謝堂

闇もなき渡し越けり夕すゞみ　近住

萱艸をひけば根のある清水かな　素情

初午や出へおれこの乃至窗臺　梅守

松風の吹わけておち鮮の声　北賀

寝てさめても心の動くきざりける　有隣

家うけの葉や花なかりしまみける　近人

打水や椽先へ出きたすこし盆　野川

蜂おふて早くもちけり山乃蟢　蒼川

藤きくや足踏つきし庭の石　つね女

笠とりて夜似合ぬ鉢たゝき　千代女

袷着て手かろくつのよ幕かな　菊泉

晴るゝ空待遠きまゝみ紫　荷風

青鷺や二里ほど遠き横渡し　蕾菜

伸過て菜の咲そふてかなかなる　楳蝶

行水のなりに舟さへ日永かな　竹た

寒潮に一浪高し夜の月　以禮

舩の舞やむくを火に臺所　三江

花の莫にや志ら也の烟直ろ川　路暁

帷子に山は雨志けれ秋風ぞ　桃江

降つゞく小雨や鶯のなく春雨　蕙甲

川風に先ちさき拂かり火取虫　先考

降まじる秋かなあられ雪は空　菊已

氷は置ても壁のまく異気　静和

きりぎりす鳴や竈のもえ細里　芳逸

雨乞の松明掛ふ小みちなれ　鈴賀

樹の風をうける憐の眼立なり　楳好

舟涼を砧やめなりけし守　素晋

葉のつゆ荷兌の音や落楓　清漱

三秀園の留守をとりて

ちる枝をきりはらさ敷く柳かな　玄子

埋ミ火やかくるゝあくらの上のひま　緑錦

秋の野ゝ方へうさよ敷千鳥かな　石鮮

帰菴

捨ちら夜かもらぬ庵の火桶哉　流芝

松島記行乃一集なきより大に称

曉臺翁の葛孫松原集にならひし

體裁なれハ植継集と題す思ふなり

鳥羽帝乃御時大内藏康光卿に

勅して松島へ千本の松植させ給ひに

よりて千松島と称ふとなん阿弥陀宗

勅使乃松と呼て二株の大樹あり里人

此松をもて證となせるなれと松か浦雄島
とよみける古歌も見ゆめれハ天仁年前
より其名あらはれて其松島乃名高くて
植継せさせ給ひしとはかりかくし又武隈の
松ハ風のたよりにかはりて千歳の記念を
失ふ常盤なる松をも植たる人も一ゆきさへ
知まくハほとなし一本なしはすくて芦野の
十あまり 柳乃栗もやをらて 朽て若木と

このまゝて萬物ともに盛衰あるなるを
時乃流行なりさまてハ舊の松原にこの
記行をも植継法道乃常盤なる人事と
なりし又其時をもしるよしともなる事
かく録しまほしき物にこそあるらめ

弘化乙巳春

影池 [印]

應需

天嶺樵人書